
もう一つの選択[東京鬼祓師]

須田 継

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一つの選択「東京鬼祓師」

【Nコード】

N0976M

【作者名】

須田 継

【あらすじ】

「チャンスをやろうか？ 七代千燹」
しちだいかずき

じゅごんはなふだ呪言花札の封印により作られた空間で、魂のみとなった七代千燹と札の番人である白と零まお ぜろは不思議な男に出会う。

第九話でももの見事にバッドエンド一直線展開になり、あえなくトウルーエンドを逃した筆者による、「はじめから」のねつ造話。サイゴの選択を七代が後悔しまくりです。

出張ってくるのは東京魔人学園の黄色い人です。

激しくネタばれしていますので、プレイ中の方はご注意ください。

(前書き)

東京鬼祓師のファンフィクションです。
とうきょうもののほらし

第九話バッドエンドネタばれ。プレイ途中やプレイ予定の方で通称『封印エンド』を知らない方はご注意ください。

その上世界観がつながっている黄色い人が登場します。

「ヤツは京一と中国に行っているはずだ！」な人や「紅葉と一緒に暗殺稼業もどきなんだろう？」って人にはおすすめできません。

※東京鬼祓師とは……

世界には《カミフダ》と呼ばれる不思議な力を持ったカードが散らばっている。そのカードの《情報》チカラを認識・識別できる特殊な眼――《秘法眼》を持つ主人公は、《カミフダ》を管理する封札師として《新宿》の鴉乃杜学園へ転校する。

そして《カミフダ》の一つである《呪言花札》じゅごんはなふだに、札を扱う執行者として選ばれた主人公は、戦いに巻き込まれていく。

九龍妖魔学園紀くーろんようまがくえんきと同じ舞台で繰り広げられる別のお話。ツツコミ所満載の学園伝奇です。

暗闇になった世界で、オレは二人を抱きしめた。

「ごめん、白^{まお}。ごめん、零^{ゼロ}」

両腕に力を込めて抱きしめる。そんなオレを、白は優しく背中を叩いた。

「お主の選んだ事じゃ。それに、妾たちを消したくないと思ってくれたのじゃろう？」

白の言う通りだった。白も零も消えて、そして自分が生き残る世界が嫌だった。

せっかく、ただの呪言花札^{カミフラ}ではなく、心を持つ事が出来た二人を、消してしまいたくなかった。

そんな白の言葉に、零は苦しげに呻く。

「それでも——僕らは七代を殺してしまったんだ」

そう、自分は死んでしまった。

大地の氣の塊である《龍脈》の力を溜めこんだ呪言花札^{じごいはなふだ}。その力を封じ込めるには人間一人分の命が必要だった。そして、呪言花札を扱えるのは白の選んだ《執行者》——自分のみ。

あの時の選択肢は、自分の命と引き換えに封印を行うか、白や零

を含めた呪言花札を消滅させるかだった。

そして、オレは二人を消せなかった。

「龍脈からため込んだ力まで封じられて、あの国はもうどうなるというんだ……」

「零……」

抱きしめていて顔は見えないが、零の嗚咽が聞こえた。

日本は緩やかな衰退の道をたどっていた。それを、龍脈の《力》を取りこんだ呪言花札で、強制的に活性化させる——それには多くの犠牲が必要だった。

それを防いだは良いものの、龍脈の《力》を呪言花札に取りこんだまま、オレは封じてしまった。つまり、今この空間を満たしているのは龍脈の膨大な《力》だ。圧迫感があるが優しい、それに包まれる心地よさ。しかし、それは返せなかった借り物だ。

《力》を抜きとるだけで終わってしまったために、近い将来日本には災厄が訪れる。それを、止める術を自分たちは持っていない。

唐突に三人だけだった世界を、ざわりとあり得ない風が吹き抜けた。

「な、何じゃ!？」

白が慌ててオレの手をほどいて、背後を睨む。零も表情を消して、油断なく同じ方向を見つめていた。

風が表れた場所から、くつくつと楽しい声が響く。男の物らしい低めの声は、闇の中で不思議と溶け込むような音だった。

「なるほど、ここに溜めこまれていたのか」

金色の光が一瞬見えた。声とともに現れたのは、白衣の男。

艶やかな黒髪、均整の取れた体、女と見間違えるような美しい顔立ち——酷く目を引く男だった。

——誰かに似ている。

「誰じゃ！」

白の甲高い声が暗闇を響く。それを受けても、男は変わらず樂しげに笑っていた。

「札でも執行者でもない者が、ここに来れるはずは——」

零の表情に動揺の色が混じる。そう、ここは札の封印された箱の中——再び封が解かれるその時まで、他の存在が来られるはずのない場所。それなのに、呪言花札の封印が解かれていない事は、《オレ》がまだ存在している《が》めに証明されていた。

零の呟きに、男はかわいらしく小首を傾げる。

「札？ 執行者？ 何を言っている。他人様の《力》を利用しようとしたせいだろうか？」

傍若無人に足を踏み出し、男がオレに近づく。そして目が合うと、猫よろしく男は目を細めた。

「おや、珍しい眼を持っているね」

「貴方は——？」

話を聞きそうにない雰囲気を感じつつも聞いてみる。
案の定、男は自分勝手な述懐を口にしただけだった。

「なるほど、外の混乱の原因はお前か」

口の端を釣り上げて男は笑う。

「外の混乱？」

意味が分からず、オレは疑問を口にする。すると男は無造作に俺の頭に手を置いていた——オレも白も零も気づかぬ間に。

「お前の選択により、外は悲しみに包まれている。見るか？」

男の手が俺の視界を遮る。

「なっ——！」

「やめろ！ 七代しちだいにこれ以上、悲しい物を見せるな！」

存外慌てた声を出す二人を無視して、何も映さなかったオレの眼にそれは映り始めた。

少女が、彼女の親友の胸で泣いていた。

甘栗色の長い髪を、その親友がそつと撫でていて、そして親友の瞳にもうつすらと涙の膜が見えていた。

「千かずき燾……」

しゃくり上げながら、少女がオレの名を呼ぶ。

「本当に……馬鹿なんだから……」

後悔の念の強い色の声で、少女の親友もオレを罵った。

黒い学生服の男が、教室の窓を拳で叩き割る。

血が流れても気にしていないかのようにひたすら殴る。

「大丈夫だって、言ったじゃねえか」

強く噛みしめすぎたのか、唇からも血が流れる。

道場で、男が素振りを続ける。

汗が流れ続け、顔色も悪くなり始めていると言うのに、一心不乱に振り続ける。

「くそッ……ワシがもつと強ければ……!」

汗なのかわからないしずくが一筋、彼の頬を伝う。

紙袋で顔を隠した少年が、自分のコレクションの一枚を手取る。

それは死神のタロットカード。

「キング……」

呟き、彼はそのタロットを元の位置に戻す。

「そんな、嘘だろう!？」

少女に胸倉を掴まれ、紅い学生服の青年は苦笑する。

「僕の情報が、どうして嘘だと言える？」

「そんな……」

少女が泣きじゃくりながら青年の胸を叩く。青年は苦い表情のまま動かない。

「薔薇の君が!？」

女子生徒の格好をした《彼》が悲鳴を上げる。静かにいら立つ少女は、その言葉に頷く。

「だからこそ、あのお人の代わりにウチらが支えななりません——この街を」

悲壮な決意を持って、少女は札を握りしめる。

「死んだらしい」

メガネの青年が静かに告げる。

「セニョールが封印を選んだの!？」

金髪の少女が驚いて身を乗り出していた。青い瞳を大きく見開いて。

「けっ。シャベエ話だぜ」

普段は髪を上げているバンダナが、今日はライバルの目元を隠していた。

女性が布団の中で眠っている。

「……ごめんなさい、千^{かず}燿」

うわ言のように呟かれた懺悔の言葉を、近くにいた彼女の父が聞いていた。彼もまた、苦しげに眼を伏せる。

「主^{ぬし}様〜!」

狛犬たる小さな少女が、大きな声をあげて泣きじゃくる。しかし、その声は彼女の同類にしか届かない。

長きを生きる狐は、困ったように少女の頭を撫でる。

「賭けは、私の勝ちですね……」

寂しげに狐は呟く。

洞窟の深部——小さな箱を拾い上げ、少女は呟いた。

「嘘つき」

涙すら凍りつき、彼女は封印された箱を握りしめる。

「――ああ！ ああッ！」

耐えられずに叫ぶ。

今見たのは仲間たち――自分が死ぬ事で生を託した存在。

けれど、悲しませるために命を捧げたのではない。己以外のすべての幸せを願って、自分は封印に臨んだ。なのに、結果は残酷すぎるものだ。

「お主は何なのじゃ！ 封印の抜け道を見つけるなど、人間のなせる技とは――」

白がオレを庇うように手を引いて抱きしめる。それに反応する事も出来ずに涙を流すオレを、男は鼻で笑った。

「そうだな。俺は半ば人ではなくなっている。俺は世界の王だから」

自信たっぷりな言葉だった。唯我独尊とはこういう男の事を指すのだろう。

だが、オレの脳裏をその感慨が占める割合はかなり低い。オレはひたすらに慙愧の念にさいなまれていた。

そんなオレに、男は首をかしげて問う。

「七代。やり直したいか？」

提案のように聞かれた言葉に、オレの中で言葉が溢れた。

「もっと、本当は選択肢があったはずなんだッ！ なのに、オレはそれを見つけられなかった！」

「見つけれなかったと諦めるか？」

「見つけれなかったという結果が今の状況じゃないか！ 時間は巻き戻せない！」

「そうだな。時間は巻き戻せない——常人ならな」

そういった男の姿が、《オレの眼》には歪んで映った。そして、不遜にも男はオレに言う。

「チャンスをやろうか？ 七代千燹しちだいかずき」

言葉の意味が分からず、オレは二の句が継げなかった。そんなオレを氣にする風もなく、男は腰に手を当てて笑う。そして、おもむろに零を指差した。

「そいつと出会った《刻とき》——富士の樹海にお前を戻してやろう」

それは、封札師としてのオレの最初だった。

零と初めて出会ったのは、封札師の試験の時。

今なら分かる——あの時が《本当の最初》だった事が。

だが——

「ちょっと待って、そうしたら《今》の皆は!？」

「さあ？ 俺とお前を除いたすべてを巻き戻すから、生きてはいても記憶は無くすだろう。それと、その間に死んだ人間は生き返る事になるな。他はわからない」

面倒くさそうに左手を振りながら男が言う。

「貴方にもわからないんですか？」

意外に思って口に出してしまった。目の前の男なら、全てを知っているように感じたからだ。

「わからないな。だが、新しい世界にはこの世界でお前が成した残滓が必ずある」

そう言っ、男は手にある手甲の紐を、左手と口を使って器用に結びなおす。

「『俺に危機が訪れた時』、俺は時間を遡る。それを利用して一度やり直せ」

男は苦く笑う。

「其方^{そち}は、一体……」

見当がつかなかったのだろう、白が疑問を呈するが、男はそんな事お構いなしだった。

「十一年前、俺も選択を強いられた。そして、俺は人の存続を望んだ。人が人のままであり続ける形での未来を」

十一年前——それは図書館の地下で出会った楼^{たかどの}万黎^{ばんり}の話と合致していた。そして、この男が誰に似ているのかをようやくオレは気付く。

この男は楼^{たかどの}に似ているんだ。

「七代、お前はどうか？ お前は人が滅びる未来、人が別のモノになる未来を望むのか？」

オレは、人が好きだ。

こんな眼を持って生まれ、つらい事もあった。だが、それでも人はそれを補って余りある物を持っている。

「オレは——オレも、人が人であり続ける未来が良い！」

オレの答えに、男はひどく嬉しそうにに笑った。

「気が合うな。俺も、人を別物にして世界を存続させようとするアイツの考えは大嫌いなんだ」

男はすつと右手を高く掲げる。

「ならば、まずはお前らに取られた俺の《力》——返してもらおうよ」

「君は、もしや——」

零が呟くのと同時に、それは起こった。

金の光が白と零の体から溢れる。そして、暗闇の中で眠っていた花札も金の光を発していた。

その光が男の右手に集まる。

やがて白と零は苦しげに呻いて片膝をつき、気が付けばオレの手元には紅い枠に真っ白な札と真っ黒な札があった。

「これで良い」

男の方を見れば、男の姿がオレには龍と重なって見えていた。

——この男はさきほど、取られた《力》を返してもらおうと言った。そして、呪言花札じゅごんはなふだが取ってしまった《力》とは即ち《龍脈》。膨大で、人には手に負えないはずのその《力》を、男はいとも簡単に己の制御化において見せる。

その《力》があれば、この国を救うことも、呪言花札じゅごんはなふだを救うことも容易であつたはずなのに——

「七代？」

オレのおかしさに気づいたらしい男は、心配げにこちらを見ていた。

そうやって自分を心配してくれるような心がありながら、目の前の男が『何もしなかった』事に対し、オレはどうしようもない苛立ちを覚える。

「それだけ大きな《力》があつて、どうして……！」

「今まで自分たちを助けてくれなかったのか？」

オレの心を読んだように言いあてられ、オレはまた何も言えなくなる。

そんなオレを、男は小馬鹿にしたように笑った。

「お前は馬鹿か？　俺が介入したらその瞬間にその二人は消滅していたぞ」

そう言って男が指し示すのは、オレの握る二枚の花札——白と零。

「俺の《力》は規格外なんだよ。簡単に存在を壊す。存在どこか

理すらも。だから、俺はギリギリのラインまで介入しない——介入できない」

苦さのこもった声だった。

この男は、その大きな《力》を使って己の願いを叶えてきたのだろう。そして、その大きな《力》のせいで守れなかったものも多いのだろう。

——悪い事を言ってしまった。

思わず落ち込んでしまったオレを、面倒くさそうにしながらも男は手を差し出す。

「解ったら、俺の手をとれ。次の世界でも、俺は絶対にお前に《力》は貸さない。しかし、取られる事にも文句も言わない」

ぶっきらぼうな、けれども温かい言葉。

関係ないと言いながらも、自分の為にご飯を作ってくれる清司郎を思い出してしまった。そして、思い出す。

「名前を、聞いてもいいですか？」

名前を聞いていなかった事を。

オレはくつくつと笑う男の手をとる。

「ひゅうたつま緋勇龍麻——時代の管理者だ」

そう声が聞こえると同時に、世界が白く染まり始めた。

「次は俺の《力》を上手く使って見せろ、七代。だから——」

緋勇さんが言葉を区切ると、完全に世界は真っ白に染まる。

「次に選択を失敗する事は許さない」

次に瞬きをした時に、この眼に映っていたのは青木ヶ原樹海の景色だった。

悲しみも喜びも、オレの中にあるだけで全て《無かった事》になる。

そう、『はじめから』。

（後書き）

以上、クリアデータで出来る『はじめから』のねつ造話でした。
ポレポレを置いてずっとこの話を書いていたり……（おい）

ゲーム的には特典付きの2週目なのですが、物語的にはこういうのもアリかな、と。にっちもさっちもいかなかった場合の助っ人として登場すればいいと思うんだ、魔人の面々は（笑）

なお、人数少ねえな、と思った方。勘弁して下さい。

まあ、とりあえずはだね……登場人物が多すぎるんじゃないー！！

《カットした面々》

- ・ 嘉門英雄（カモン・ヒーロー）
- ・ 伊佐地センセ（封札師の教官）
- ・ 筑紫さん（封印解いちゃった人）
- ・ 牧村先生（どう考えても宝探屋）
- ・ カルパタル（カレー屋の店主）
- ・ 富樫刑事（カレー好きの女刑事）
- ・ 渋川さん（眼帯している喫茶店マスター）

好きな人には申し訳ないが、カモン・ヒーローはドウカイ君より苦手です……。

そして紅緒さんと楼は、悲しまないと思うんだ……（笑）

ご感想・ツツコミ、ございましたらどうぞお気軽に。

では、楽しんで頂ける事を祈って。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0976m/>

もう一つの選択[東京鬼祓師]

2011年10月6日16時59分発行